子どもの追求力を育てる社会科学習

社　会　科

1．はじめに

社会事象に対する驚きや疑問を自らのものとし，自分自身の問題として追求し解決していく学習力は，小学校六年間の見通しの中で，育てていくものとして考えている。さらに，単元学習においても，その学習のはじまりから終末に至る過程において「調べたい。」「たしかめたい。」というめあて追求の意欲や能力は育て続けなければならない。

昭和60年度の研究は，「児童による学習課題の把握」の過程について，「教師の指導のねらい」をどのように「児童の学習のめあて」として意識化していくか，という具体的テーマにそって進められた。社会科としては，「学年の発達段階に応じた，学習課題の把握のさせ方」について，単元の導入時や一時間の学習の中で「学習のめあてを育てる場の構成」という視点から実践研究をおこなった。本年度は，それをうけて，自分たちのめあてを追求する段階での子どもたちの姿に焦点をあて，単元全体や一時間の学習における「めあて追求のための授業条件」について考えてきた。

2．社会科における追求力

めあてを追求する時に必要な能力の一つは，問題解決に直接必要とする情報を獲得するための技能や能力である。観察・見学・インタビュー・調査などの直接経験の方法をどれだけ身につけているかということである。また，読書・統計や地図の理解・説明を聞き取る力などの間接経験を自分のものとする技能や能力も学年が上がるにつれて大切になってくる。これらの技能や能力に欠けると，正しい問題の解決や追求する楽しさのある学習展開は期待できない。特に，情報の洪水ともいわれる現代社会の中で生きていくためには，このような情報処理の能力は，今後ますます必要となってくるであろう。

しかしながら，学習指導においては，これらの技能や能力を高めることだけをねらって学習活動が行われるわけではない。社会事象に対する児童のめあて追求の過程で，これらの技能や能力が駆使され高められなければならない。どんな社会事象から自らの力によって学びとらせ，自分たちの生活を切り開いていく力となる社会科の学力を培うかが大切である。したがって，「社会科における追求力を育てる」ということになれば，「どんな教材を，何年生で，どんな方法により学習させれば児童自らの学習ができるか。」ということになる。どんな教科の学習指導においても，このことが明らかにされなければ，効果的に育て続ける指導は望めない。

3．めあて追求のための授業条件

(1)　発達段階に応じた指導

社会科の基本的な追求過程として，児童がめあてをつかみ，予想し，調べ考え，確かめていく学習の流れが一般的な学習展開のパターンである。しかし，子どもたちの反応は多種多様であり，必ずしも教師の計画どおりに教材内容の理解や追求が進展するものでもない。子どもたちの「調べてみたい。」「確かめてみたい。」という意欲や問題意識が出てこないうちに，教師のねらいをおしつけたり，子どもの実態をとらえず教師の計画した学習ステップに，子どもたちの学習活動をはめても，社会科としての追求力はそだたない。教えようという意識をすてて，授業展開をパターン化しないことである。

しかしながら，六年間の見通しを持って追求力を育てていこうとするならば，学習の場における各学年の児童の特性に応じた指導のあり方や重点を設定して実証したり修正したりして見通しをよりたしかなものにしていかねばならない。

◇社会科学習の発達段階案◇

学　年	学習の場における特性	指導のあり方と重点
1・2年生	• 動きまわって，見つけることを好む • 自分の関心について話すが根拠弱し • 興味・関心は持続，しかし拡散的	• 具体的・感覚的な体験と表現の楽しさ • 活動的・操作的な学習場面の設定 • 一単位時間での追求活動の繰り返し
3・4年生	• 行動力を持ち，積極的に確かめたがる • 「なぜ，どうして」しかし断片的 • 予想ができ，論理性，集中的追求の芽生え	• 探索的な活動と問題把握の楽しさ • 意見対立話し合い学習場面の設定 • 課題追求的学習過程の原型
5・6年生	• 資料で調べることを好み静的にもなる • 自分の論理に普遍性を持とうとする • 持続的に深く追求できる	• 児童個々の個人研究学習の楽しさ • 課題追求の学習場面の設定 • 教師と児童の単元を見通した学習計画

(2)　魅力的な教材の開発

授業づくりにおいて「目標」「内容」があり「方法」を考えていくことを，社会科にあてはめてみると，教師の創造性やアイデアを発揮しなければならないのが，教材の開発である。子どもたちは，めあてをつくることに対して学習意欲を示すのではない。子どもたちが，追求意欲をおこすのは，驚きや新鮮な出会いをひきおこさせる魅力的な教材内容に対してである。追求が継続するのは，めあてづくりにどれだけ子どもにかかわらせたかが第一の問題ではない。教材に対するめあてが，どれだけ主体的に取り組める学習内容を含んでいるかが大切なのである。めあてを持って学習し追求力のある子どもを育てるには，その教師とその子どもたちとの個性的で新鮮な教材を開発することである。めあて意識を育てる教材の条件としては，次のことを考えている。

イ．具体的であり，意外性や驚きがあること

ロ．児童の発達段階に即し，事象の解釈にほどよい抵抗があること

ハ．児童が主体的に追求活動のできる多様な場を設定できること

ニ．指導のねらいの達成（児童のめあての解決）に必要な事実を含み成就感が持てること

(3)子どもが自ら動く指導の技術

どんなに教材研究をし，よいねらいを設定しても，子どもの実態や反応を的確に把握することができなかったり，説明・指示・発問・資料の提示などが適切でなければ，めあてを追求する授業にはならない。これらは，指導場面における教師自身の課題である。社会科の指導の難しさは，子どもの思考や理解のつまづきをとらえにくいことである。子どもたちの社会的経験は，多種多様であり，計算問題の誤りやすじ道を指導するようにはいかない。したがって，学級の全員が一つの土俵で共同思考もできにくい。このことを克服して，追求力を育てる指導技術の条件として，次のことを考えている。

イ．民主的な人間関係を育てる……子どもが開放され信頼に結ばれた集団をつくる

ロ．一人ひとりの意識を把握する…教師は子どもの事象に対する意識をつかむ手だてを持つ

ハ．共通経験を出来るだけもたせる……子どもの意識を同一方向に向ける手段を工夫する

ニ．学習指導の技術を磨く……教師は子どもの実態に応じた指導の計画性を持つ

（大脊戸・吉浦・富村・上之園）